

令和4年度第1回愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
共同利用運営委員会（メール審議）議事概要

1 期 間：令和4年6月13日（月）～令和4年6月20日（月）

2 出席者：中井委員長，杉森委員，谷岡委員，榊原委員，丸山委員，竹山委員，小林委員

3 議 題：

(1) スタッフ・ディベロップメント・コーディネーターの認定について

議題1について，資料1-1～2，別添資料1及び参考資料1～2に基づき書面審議を行った結果，申請のあった1名について要件を満たしていると認められたため，SDCとして認定することとした。

(2) 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用運営委員会内規等の一部改正について

議題2について，資料2-1～3に基づき，愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用運営委員会及び共同利用推進会議内規の一部改正（令和4年4月1日付け施行）を行ったこと，並びに共同利用運営委員会委員及び共同利用推進会議委員の交替について説明があり，承認された。

(3) 令和4年度教職員能力開発拠点の運営経費支出計画について

議題3について，資料3及び参考資料3に基づき，報告を行った。

(4) その他

<主な意見等>

- ・SDコーディネーター認定について，本人が了承した場合については，分野やテーマとあわせて，コーディネートの面での特徴など，個別紹介も公にできると全国の教職員で学びあう際の選択の情報共有に役立てられるのではないかと。
- ・ウェブサイトコラム欄を作り，SDCに認定された方に順番に取り組みを発信していただければどうか。SDCの知名度向上にも繋がり，取得後の活動報告にもなるのではないかと。

令和4年度第2回愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
共同利用運営委員会（メール審議）議事概要

1 期 間：令和5年1月23日（月）～令和5年1月31日（火）

2 出席者：中井委員長、杉森委員、谷岡委員、榊原委員、丸山委員、竹山委員、小林委員

3 議 題：

（1）スタッフ・ディベロップメント・コーディネーターの認定について

議題1について、資料1-1～6、別添資料1～3及び参考資料1～2に基づき書面審議を行った結果、申請のあった3名について要件を満たしていると認められたため、SDCとして認定することとした。

（2）その他

<主な意見等>

・SDCの方々には、教育学術新聞へのご寄稿のお願いも検討ください。

令和4年度第3回愛媛大学教育・学生支援機構
教育企画室共同利用運営委員会 議事概要

1. 日 時： 令和5年2月20日（月） 14：00～16：00
2. 方 法： オンライン開催（Zoom）
3. 出席者： 中井委員長、杉森委員、谷岡委員、榊原委員、丸山委員、竹山委員、小林委員
陪席者： （愛媛大学）教育企画課 高木課長、石川副課長、進藤TL、宇都宮部員、穴吹部員

4. 議 題：

（1）令和4年度教職員能力開発拠点の活動報告及び予算執行状況について

中井委員長から資料に基づき、SD コーディネーター養成講座や IRer 養成講座などの研修や、書籍等の情報発信関係を中心に、今年度の活動報告があった。また、事務担当から予算執行状況について報告があった。

<主な意見等>

- ・動画教材の作成は今年度も行っているのか。
→継続して作成している。今後は研修の事前学習としての動画や、実施した研修を録画して活用することなども計画している。

（2）令和5年度教職員能力開発拠点の事業計画について

中井委員長から、資料に基づき令和5年度の事業計画について説明があり、原案どおり了承された。

（3）スタッフ・ディベロップメント・コーディネーターの資格認定基準の変更について

中井委員長から資料に基づき、スタッフ・ディベロップメント・コーディネーターの資格認定基準について、現在の基準に対する意見等を踏まえて変更する旨説明があり、原案どおり了承された。

<主な意見等>

- ・新基準の「5. 講師として効果的な研修を担当できる」は、評価基準が分かりにくいので、面接審査の際などに説明が必要ではないか。

（4）令和3年度実施状況報告書に基づく文部科学省からの指摘事項について

中井委員長から資料に基づき、令和3年度実施状況報告書に基づく文部科学省からの指摘事項について報告があった。

（5）今後の取組に向けた意見交換

本拠点の今後の取り組みに向け、活発な意見交換がなされた。

<主な意見等>

①対面開催の研修の工夫

- ・対面で実施しなければならない研修にする。ただ聞いているだけの部分はオンデマンドでもできる。対面とオンラインの二極化ではなく、対面にオンラインを組み込むなど融合を体験できる研修にした方が、受講後に授業でも活用しやすい。

- ・対面のニーズはあると感じている。対面研修の対象者について検討が必要である。例えば、SDC 認定者たちが自大学でどのような活躍をしているか報告する、OB・OG 会のような場を設けるのはどうか。
- ・ハイブリッドでの研修は、受講者数は増えるが運営が大変である。また、対面参加者とオンライン参加者との温度差が生じる懸念がある。
- ・拠点同士で協力して複数会場を用意し、各県の受講者は近くの会場で対面受講する。研修の共通部分はオンラインを活用して同じものを見ながら、ワークはその会場の人たちと対面で行う方法もある。
- ・他大学とのネットワーク、人と人との関係づくりのためには、対面の方が効果的である。

②新規プログラム、教材への期待

- ・オンライン授業実践の蓄積はされてきたが、それに関する学術的な検証と整理がされていないのでテーマとしてよいのではないか。
- ・4年間のカリキュラムは既存の書籍等で概ね分かるが、履修証明プログラムなどの短期プログラムの企画・運営・改善の方法について、カリキュラム・コーディネーターの応用編のような位置づけのものがあっても良い。
- ・部署によっては教務的な観点が必要になり、教務経験の有無が業務に影響する可能性がある。土台としての教務情報をプログラム化するとよい。
- ・研修を受講する際、事前に自大学の取り組みを持ち寄っても、それについて携わることがないまま終わってしまう場合が多いので、自大学の課題をもっと徹底的に洗い出すといったものがあると良い。

③第4期の拠点申請の内容

- ・今のプログラムをさらに発展させる。
- ・政策の具体的な解決を示唆するような研修を行うのはどうか。
- ・地域ごとの棲み分けは、これから難しくなってくる。

④拠点を担う人材の確保

- ・実施者同士の交流機会を継続していく。
- ・雇用しない形での研究員の相互利用ができれば。ただ、これをやりすぎると複数拠点の必要性がなくなる懸念もある。
- ・執筆、広報活動を取り入れる。SDC 取得者の教育学術新聞等業界紙・誌への投稿もよい。

その他

<主な意見等>

- ・外部の人が愛媛大学の教員に相談したい場合、どういう内容なら受けしてもらえるのか、誰に対応してもらえるのかといったことが分からない。
- 説明が不十分なところがあると思われる。どんなニーズに応えられる拠点なのかを発信する必要があると考えている。